

## 思い出の日食遠征(18)

# モケグア日食(1994年)

秦 茂

センチメンタル・ジャーニーというタイトルの昔の映画を覚えている方は殆ど、おられないと思うが、私にとって今回のペルー行はまさにそのセンチメンタル・ジャーニーだった。1966年に起きた皆既日食は、太平洋からペルーに進入しペルー第二の都市アレキパを通過してチリーに向かうのに対して、今回の日食は太平洋側からアレキパ、アスンシオン、イグアスの滝と南アメリカを横断する。どちらにも共通する都市アレキパは1994年日食では北限界線に近く、1966年日食では南限界線と言った違いはあるが、航空機でアレキパ空港に入り車でそれぞれ中心線に向かうことになる。

1966年日食の時のペルー滞在が比較的長期に亘っていたので、ペルーには思い出が深い。私達が陰の隊長と呼んでいた森崎一義氏、インカ博物館の創立者天野芳太郎氏には滞在中、大変にお世話になった。1994年にはこのお二人とも故人になられてしまったが、チグアタ村の私のスペイン語の教師や森崎氏のお子さん、それに長らく文通を重ねていたフェルナンド・ロマーニャ氏がアレキパに住居を構えておられる。この年の年賀状には10ヶ月後のペルー、ブラジル日食は不参加の予定ですと、日食仲間には書き送っていたのに拘らず、この機会に二人でも三人でもいいから会って置きたいと思ったのが、1994年日食に参加した理由の一つである。

しかし良く考えて見ると、この旅行は団体旅行だから添乗員がついていて、個人の勝手な行動など許される筈もない。まして1993年までペルーについては外務省の旅行自粛規制が続けられ、翌年1月に規制が解除されたばかりである。リマやアレキパでは友人の個人的な訪問など殆ど見込みがないと思いながら、十分の一の期待を掛けて、この旅行に参加した。

テロと貧困の国ペルーについては1996年12月17日に起きたリマの日本大使公邸へのトゥパク・アマール革命運動のメンバーの突入、そして127日後、フジモリ大統領によるペルーの特殊部隊の活躍によって犯人は全員射殺され、人質71人が救出された事件は、まだ皆様の胸に鮮明に残されている筈である。時の人、フジモリ氏のフジモリ政権が発足したのは4年前の1990年のことで、その後2年をかけてテロ集団 センテロ、ルミノソ(輝ける星)の壊滅とコカインの押収に精力を傾けられたと聞いている。コカの栽培地帯とテロリストの分布は一致していて、一時、ペルーのテロリストは1万人から200人に激減したという。それでもなお1994年当時リマ市はテロとひったくりの横行する街として知られていた。ここではフジモリ大統領についての話はどうでもいい、とにかく余程の偶然が幸いしなければ旅行中の個人の自由など許される筈もない。

南アメリカの地図を見ると、ペルーは太平洋に沿った細長い国土で、その地勢は三つの地方に分れている。砂漠を含む海岸地方、アンデスの山岳地帯それにアマゾンの密林地帯であるが、28年前の観測地の選定と今回のそれとがあまりにも、似通っているので1966年日食の場合を参考の為、書き加えて置く。

日食の1ヶ月前に候補地として残ったのはアレキパ県カナガスとアレキパ県チグアタ、タクナ県チンタリの三か所、カナガス、チグアタ、チンタリの順に天文学的条件の点で優れている。

日食中心線により近いこと、標高が高ければ高い程、皆既中の空が暗いこと等である。標高 4100 メートルのカナガスが第一候補だったが、現地調査に出向いた三人の内、二人までも軽い高山病にかかり結局第二候補のチグアタ村が最終的に残った（チグアタ村の標高は 3000 メートル）1994 年の場合は標高 1400 メートルのモケグアの飛行場跡で観測する予定だったが、一日前のリハーサル状況から更に 600 メートル登ったパンパ・デ・サントニオの丘が最終的な観測地となった。

1991 年ハワイ日食でも四輪駆動車で高地に行けた観測者と平地の観測者が明暗を分けた様に、今後、皆既帯の地勢によっては登山装備の日食観測も成立しそうである。少なくとも 1966 年、1991 年、1994 年のケースでは標高が高ければ高い程、天候に恵まれていた様である。

10 月 30 日の午前中に、我々のグループはシンガポール航空でロスアンゼルス入りした。航空機内での睡眠不足と時差ボケ防止のため、添乗員は早速ロスのホテルを予約して部屋割を始め、日の高い内に仮眠を取っておく様に全員に申し渡していた。極めて適切な処置なのだが、私自身どうせ昼間からは寝られないので同室の丹羽さんと添乗員を誘ってホテルの角からバスでロスのダウンタウンに出かけた。別に買物がある訳ではないが、ここの二階で軽い食事をと考えたのだが、丁度風時でバイキング形式の食堂は大変な人混みだった。アメリカ人は当然だが、黒人、東洋人、ヨーロッパ人などまるで人種のルツボを見る様だった。

リマ行きの日食特別機は、その日の深夜、ロスを出発し翌 31 日アレキパに到着した。この間、19 時間 30 分以上機内に閉じ込められていた訳だからロスのダウンタウン行きは私には息抜きだった。アレキパと言う町の名前の由来は、町を見おろしているミスティ山の山陰にあるところから、来ているという。背後のアンデスの山々が美しい。病院や国立ホテルは最近のものだが、町並みは 28 年前の面影を残していて、私には懐かしさがこみ上げるばかりだった。

一年前に大越さんが、下見に来られた観測候補地はアレキパから更にバスで 3 時間半も離れた人口 25000 の小さな部落、モケグアである。日食二日前の 11 月 1 日は国民的な祝日（万聖節）ということでモケグアでも大変な賑わいを見せていた。マーケットの人出も凄く、墓参りの方々も見られたが、マーケットにカメラを持って撮影に出かけた我々の方が部落の人々には珍しい見せ物だったかも知れない。



中央のメリーゴーラウンドには子供が集まっていて頑丈そうな男の人がゆっくりと人手で、そのメリーゴーラウンドを回しているのもほほえましい光景だった。

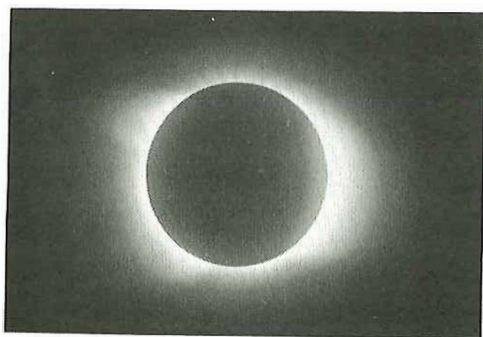
日食の前日、第一接触が現地時刻で 6 時 15 分なので、早朝国営ホテルを出発して 観測地に向かった。一隊はホテルに隣接する飛行場跡、もう一隊はパンパ・デ・サントニオの丘の上である。

飛行場跡で予定通りにリハーサルに入ったのだが、ここでは第一接触を過ぎて霧が発生し始めた。二度、三度と霧が厚くなって太陽を覆い隠す状況になったので私はリハーサルを中断して、丘の上への移動を提案した。見物に来ていたバスの社長さんに相談してみると、経験によれば丘の上ならば霧や薄い雲は避けられそうだとのものである。ついでに社長さんの厚意に甘えてジープで 600 メートル程、高い丘の上ーパンパ・デ・サントニオに私と大久保さんが同乗させていただき観測地を変更することになった。

丘の上は心配した風もなく、飛行場跡を覆っていた霧も丘の下に見えているので、翌日は全員パンパ・デ・サントニオで観測することに決まった。

早朝の日食ということもあって、殆ど眠れなかった方もおられたようであった。11月3日の日食当日はやはり眠りは浅かった。1時頃起き出した私の眼に写った空にはシリウスとオリオンが鮮やかだったが、霧のためか低空の星空は色あせて見えていた。南半球の星空を撮影しようと考えている人達、早めに望遠鏡のセッティングを済ませようとしている人達は、出発を急いで午前2時半にはホテルを離れた。私は後発のバスで出かけたが、丘の上は前日の快晴と打って変わって薄くもりだった。メンバーの中には 1991 年日食のハワイ組も何人かいて、今回も駄目かと諦めている方もおられた様であった。

薄雲を通して見える太陽をフィルターで追って行くと時々雲の厚い所で太陽を見失ってしまうといった天候だったのである。私達が観測機材を組み立てたのは飛行場跡を見おろす崖の上だったが、この時アメノウズメノミコトが実際に現れたのである。この話は日食情報 1994 年 NO.4 に書いてしまったので重ねては書かないが、天の岩戸が少しだけ開けられたのである。薄雲の上に投影されたかの様にコロナが浮きだして見えていた。



ハワイ組が興奮で震えていたように私には見えた。とにかくコロナに向かって一斉にシャッターが切られた。薄雲ににじんだダイヤモンドリングを残して皆既は終わった。それまで気が付かなかったが、崖の近くの私達を取り囲む様に土地の人や観光の人達が詰めかけていたが、皆既の終わりと共にバスや車の方に消えていった。

地図の上での測定によるとモケグアの緯度は 17 度 12.0 分 S、経度は 70 度 56.0 分 W となっていたが、丘の上で実際に丹羽さんが GPS を使って測定された結果によると、緯度は 17 度 14 分 39 秒 S、経度は 70 度 54 分 19 秒であった。標高は 2000 メートル、皆既の時の気温は 16 度 C。

GPS については砂漠の中とか一面の雪原で自分のいる位置を知るためには特に有用だと思はれるが、日食現場では更に携帯用のパソコンを使って接触時刻の予報値の修正を行うことになる。

(日食情報 1996 年 NO.3: 丹羽 誠さんによる\*GPSの利用\*を参考にしてください)。これからの日食遠征では短波受信機、GPS、パソコンなどがリーダー或は旅行社の必需品となるのだろうか。多くの場合、観測者は望遠鏡とビテオで各自の重量制限は一杯である。

メケグアの丘の上には私達の他にアメリカからの観測者が来ていたし、近くのタクナには日本からの 38 人に加えて、アメリカその他の国々から 1500 人も参加があったと伝えられている。日本人とアメリカ人は特に皆既日食の見物に熱心だと誰かの記事で読んだ事がある。無くなって行く太陽への驚き、真珠色のコロナの素晴らしさについてもその記事では、両国民が原始人に近いからと書かれていたけれど果してそれだけの理由で説明出来るのだろうか？

さて、今回の日食行では日食当日までのゆとりは十分だったが、その後は結構慌ただしい。その日の内に機材をまとめてアレキパのホテルに引き揚げたのだが、オンボロバスに揺られての 4 時間は、往きにも増して強行軍だった。

アレキパのホテルに落ち着いてから、自己紹介や反省会の機会が持てたのだが、成田からリマまでの航空機の中で、私の元に 10 年前のニューカレドニア日食のスナップ写真が遅くなりましたがと届けられたり、昔ハタさんに三鷹の 65 センチのドームで土星の輪を見せて貰った事があったと話かける人など。以前の日食で一緒だった仲間、発行して 18 年になる日食情報誌を通しての付き合いなどでグループはすでに同窓会の雰囲気だった。

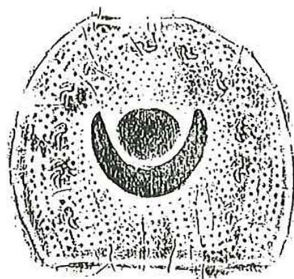
一日帰国の早い私達 5 名はアレキパのホテルに一泊した翌日、本隊と別れてリマに向かった。たった一人だけの添乗員が我々に同行していただけたから当然その添乗員は本隊に付いて行く。旅行社の方でも困ったのだろうが、この時点で私達をガイドしてくれる添乗員がいなくなった。リマまでは通訳の若林さんがおられたので、心配することは無かったが、マイアミを經由してロスアンゼルス、成田間は誰も付いていない。アレキパの夜、PT S の田村さんからマイアミ空港の地図のコピーを貰い、マイアミでは入国審査を受けなければならないこと、荷物に付けるラベルは N R T とすること、L A X だと成田に着かないでロスどまりになってしまうから気を付けることなど、にわか勉強をさせられる。おかげで？アレキパのロマーニャさんとの 28 年ぶりの再会は果たせなかった。

リマでは予定通りに天野博物館を見物した。博物館を創設された天野 芳太郎氏は 1982 年 10 月 14 日に死去されているが、私には 1966 年ペルー日食の後でジョニ赤一本、二人で徹夜で飲み明かした思い出がある。ここはインカ文明については世界最高の博物館である。天野氏はパナマで、天野商会を興し中南米、北米に事業を広げられた方である。第二次世界大戦で帰国を余儀なくさせられるが、終戦後ペルーに再渡航され古代インカ文明の研究に没頭された。その成果がペルー市ミラフロレスに残されているのである。

朝日新聞に紹介された記事を私はまだ保存しているが、その一文の最後の行には「偉大なインカ族の前に一天野の存在など」と自己を語るのをきらった。まさに明治の男だった。」と書かれている。

博物館の応接間で私達 5 人は日本茶をご馳走になった。ペルーでは初めての日本茶を味わっている私達の前に、博物館の二階から平たい壺を持って館長が現れた。小さい壺なのだが大切そうに抱えている壺の側面には、片面に部分日食その反対側には皆既日食の図が浮き彫りになっている。チム文化の 800 年から 1000 年の時代の物だとのこと、記念にと用意してあった両面の拓

本をいただいた。日食に驚いて飛び立っている鳥はペリカンとのことである。



所で、リマ市内には森崎氏の二人のお子さんが現存しておられる所までしか分かっていない。アレキパを離れてからは添乗員もいないのだから勝手な行動が取れる筈だとは思っても 28 年前の記憶を頼りにリマ市ヘスス・マリアの家を捜し出すのは容易なことではなさそうだ。当時、森崎氏の次男は大病院の脳外科部長をされていた筈といった手がかりから電話連絡をして下さったのは通訳の若林さんである。ペルーの人達の生活が覗けるといった興味から5人とも私の友人アルフレッド・モリサキさんの家に同行することになった。

アルフレッドさんのお宅にタクシーで出かけた。二階のベランダには有刺鉄線が張り巡らされているし、世相の険しさが分かるようであった。ペルー式に私達は肩を抱き合って再会を喜び合った。

ウイスキーの水割りをご馳走になりながら、森崎一義さんの思い出やアレキパの話や夜遅くまで話会ったのだが、すべて通訳の若林さんを通してである。ペルー最後の夜だ、有名な夜店も見たい。幸い帰りのタクシーの中でホテルの近くに夜店が見つかったのでゆっくりと買物を楽しんだ。

薄雲を通してではあるが、コロナは十分眼に焼き付ける事ができたし、アルフレッド・モリサキさんとの再会も果たせし、思い残すこともあるが満足度 70 パーセント以上の日食行であったと思っている。

リマに行ったら是非、見物して置く価値があるとされていたのはインカ博物館であるが、もう一つナスカの地上画がある。リマから南パナメリカン・ハイウェイでナスカに行くと、350 キロメートル平方の広大な砂漠にペリカン、とかげ、さぎ、はちどり、鯨、さめ、コンドル、ラマ、くも、猿それに雄大な幾何模様が描かれていて、例えば、しっぽがスパイラルに巻かれている猿にしても大きさが 90 メートルもあって砂漠の中を歩きながらではとても形が掴めない。

傍らに専用の小型機用の空港があって地上画の上空を飛んでくれるのだが、一寸チップをはずむと怖い様な低空飛行や軽業飛行をやってくれる。ナスカの陶器や織物の染色には宇宙飛行士を連想させる模様もあって今だに謎を呼んでいる。



ASTRONAUT